

# 国庫省中部地整・水機構中部支社の回答 に対する見解

2017年4月25日

長良川河口堰最適運用検討委員会  
委員 今本博健



宮本博司氏は淀川水系流域委員会委員長に就任したときの挨拶で次の4つを国交省近畿地整に要望している。

- 隠さない
- 誤魔化さない
- 逃げない
- 嘘をつかない

翻って、これまでの国交省中部地整・水機構中部支社の回答を見るに、4つの禁じ手のオンパレードである。

### 3.1 治水面上における河口堰の必要性について

浚渫計画には3つの時点でのものがあり、それぞれ最新の河道を対象とした水位計算により流下能力を評価しているというが(第1次回答)、63年および72年時点の計画に対する水位計算結果は示されていないうえ、どのような粗度係数を用いたかは確認できないとされており(第2次回答)、両時点で本当に水位計算を行ったかは疑問である。

また89年時点の計画は87年河道を対象とした水位計算で浚渫量の妥当性を確認しているとしているが(第2次回答)、嘘をついている。この水位計算が行われたのは90年であり、89年の浚渫計画に反映させることはできない。

### 3.2(2)粗度係数・流下能力について ①76年洪水粗度係数(84年算定値)

76年洪水の粗度係数が最初に算定されたのは84年である。「木曾三川～その流域と河川技術」によると、当時としては最新の手法の不定流計算を用い、潮汐の影響を考慮している。この計算では、時間間隔は $\Delta t=15\text{sec}$ とされ、計算の対象期間は9月9日の1:00から12日の24:00までの $T=96$ 時間である。

ところが、第1次回答では「この粗度係数を4波にわたる長時間の中での第1波のみのものであり、洪水全てを対象とした値ではありません」としており、嘘をついている。

さらに、「昭和三大洪水と呼ばれる59年、60年、61年あるいは76年洪水第4波時の粗度係数に比べて値は小さく、安全側の評価となっていないため、これを流下能力の評価に用いることは不適當です」としているが、三大洪水後になされた河川整備により流れやすくなったため粗度係数が小さくなったのであり、76年洪水第4波時の粗度係数は恣意的に過大になるよう算定されており信用できない。誤魔化そうとしている。

### 3.2(2)粗度係数・流下能力について ⑦粗度係数算定における水位

76年洪水第4波時の粗度係数の算定では水位として洪水痕跡を用いている。

第1次回答では「90年に算定した76年洪水第4波の粗度係数は洪水痕跡による水位と観測された水位の両方を考慮した上で算定しています」としているが、観測水位を用いているのは第1波に対してであり、嘘をついている。

### 3.2(2)粗度係数・流下能力について ⑧粗度係数算定における流量

76年洪水第4波時の粗度係数の算定では墨俣地点流量について次のように回答している。

第1次回答では「墨俣地点での流量観測値が十分に得られず、水位流量曲線を作成出来なかったため、忠節地点の流量観測値と基本高水の設定に用いた貯留関数法により墨俣地点のピーク流量を推定しています。使用した貯留関数法の河道モデルには、伊自良川の合流量や河道貯留による流量低減等が含まれています」としている。

第2次回答でも「墨俣地点における水位流量曲線はありません」としている。

しかし、この問題を取材した記者は流量年表水位流量曲線原本と記された資料に9月12日5時にピーク流量が6448m<sup>3</sup>/sとされていることを視認している。国交省は嘘をつき、水位流量曲線を隠している。

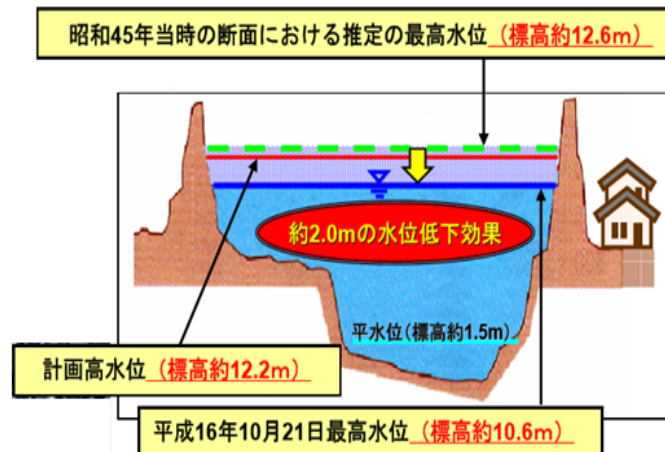


### 3.2(2)粗度係数・流下能力について ⑨04年洪水についての水位計算

04年(平成16年)洪水は墨俣地点で観測史上最大の8000 m<sup>3</sup>/sを記録した。計画高水流量を超えたにもかかわらず、水位はTP10.6mで計画高水位TP12.2mを1.6mも下回った。

第1次回答では「70年(昭和45年)時点の河道に8000m<sup>3</sup>/s流れた場合の水位はTP12.6mであるので、浚渫および潮位変動等により約2mの水位低下があった」としている。

しかし、墨俣は河口から39.4km地点にあり、感潮区間の上縁近くのため潮位の影響はほとんどないと考えられる。したがって、水位低下は河積が増大したためと考えられるが、浚渫は計画高水位を1.6mあるいはそれ以上低下させることを目的にしておらず、8000m<sup>3</sup>/sに対して計画高水位をこれほど下回ったのは浚渫が過大だったことを意味している。このことに国交省は言及しておらず、逃がっている。



### 3.2(2)粗度係数・流下能力について ⑩04年洪水についての粗度係数

第1次回答では、04年洪水の40.0km～56.2kmの粗度係数の算定結果を提供しているが、40kmより下流については「40 kmより下流の粗度係数についても、計算は行っていますが、ピーク流量の発生前後において潮位の変動量が大きかったこと(台風の影響による高潮が発生した後に下げ潮となっている)などの影響により、値の信頼性が低いと考え、誤解を避ける観点から示しておりません」としている。

しかし、観測結果は実際に起きた現象を示すものであり、当委員会には示すべきである。それをしないなら隠していると言わざるを得ない。